

登米総合産業高吹奏楽部

前列右端が千葉歩部長、隣が工藤風汰、後列右端が小松裕樹先生



「第27回日本管楽合奏コンテスト全国大会」は11月20日、動画審査にて実施され、登米総合産業高吹奏楽部が15人以下で編成するS部門で優秀賞に輝いた。同校の全国大会出場は二年前、特別賞であるヤマハ賞を受賞して以来2度目の快挙。二年前も全国大会へ出場した千葉歩部長は「以前は先輩たちに連れていってもらったので、自分たちの代でまた出場することができてうれしい」と喜びを語った。

吹奏楽コンクール県大会出場と管楽合奏コンテスト全国大会出場を目標に臨んだ今年、顧問の小松裕樹先生が強豪校を参考に自主性を重んじることだった。「今年は積極的に意欲的に挑戦できる部員が多い。自分たちで考えて動けるメンバーがそろっている」と思い決断した」と小松先生は当時の心境を振り返る。

演奏のリーダーシップを執るコンサートマスターには2年の工藤風汰を指名。千葉部長は「人一倍音楽と向き合っていて、安心感がある。先輩だが、的確に指摘してくれる信頼できる存在」と太鼓判を押す。小松先生の思惑通り、生徒たちは工藤を中心に自分のすべきことをそれぞれで考え、練習に励んだ。演奏曲として選んだのは、二年前に同コ

ンテストでヤマハ賞を受賞したときと同じ作曲家・松下倫士氏が手掛けた「悲歌」能く道成寺の物語によるバラード。この曲は、女性が嫉妬心からへビになり、男性を殺してしまうという道成寺物語を元に、複雑な心境変化を表現した激しい展開が特徴の一曲。演奏で気を付けるべきポイント、気になったことなどはその都度楽譜に書き込む。メモで埋め尽くされた譜面は、部員たちのこれまでの努力を物語っていた。

全国大会へは、事前に行われる録音審査で出場枠を勝ち取る必要がある。部員一人一人が場面ごとの心情を想像し、演奏で表現する。コロナ禍で演奏する機会が少なくなっていた中、積み重ねてきた思いをテープに吹き込んだ。千葉部長が「かなり良い感じで表現できた」と自信を見せた演奏は、見事全国大会出場を決めた。全国大会は、感染症拡大防止のため、映像審査での開催。前回のヤマハ賞には及ばなかったものの、二年前より良い得点を獲得し、全国の舞台でも高評価を得た。

12月に開催されたアンサンブルコンテスト地区大会では、同校初の金賞を獲得。工藤新部長のもと同校吹奏楽部は、再び全国の舞台を目指す。

N-UP[∞] (登米総合産業高機械工作部)

左から安部天真、高橋虹希、山田涼太郎



「ロボットコンテスト兼全国高等学校ロボット競技大会宮城県予選会」は9月11日、古川工業高で開かれ、登米総合産業高機械工作部から出場した「N-UP[∞]」が優勝。同校として三連覇を達成した。昨年に続き操縦を担当した山田涼太郎部長は「三連覇が懸かり、昨年以上にプレッシャーは大きかったが、優勝できてよかった」とほっとした表情を見せた。

毎年課題が変わるロボットコンテストの詳細は、4月に発表される。発表後、大会と同じ規格の練習用コースの制作からはじめ、ロボット制作、試運転、調整と段階を踏んでいく。「ロボットの規定が今までで最も小さく、全体的に小型化する作業が一番大変だった」と山田部長は制作の苦労を振り返った。

顧問である相沢牧彦先生のアドバイスに耳を傾けながら、一つのパーツに複数の機能を持たせるなど小型化するための工夫をしながらの制作。コースづくりや溶接は機械科の山田部長と安部天真を中心に、ロボットのフレームは部内一几帳面な高橋虹希を中心に作業を進めた。一からロボットを作り上げるには、莫大な時間が掛かるが、これまで先輩たちが積み上げてきた技術と知識を生かし、順調に仕



今年の大会で使用したロボット

上げの段階に。歴代で最もシンプルな構造のロボットが完成し、重要な作業である微調整のための試運転に入った。チームでの話し合いを重ねながら何百回と微調整を繰り返す。三人にとって高校最後の夏休みの多くをこの作業に当てた。

県大会は、クリアした課題の出来とタイムで順位が決まるポイント制。連覇の期待を背に、山田部長が先陣を切って操作に臨む。順調なスタートを見せると、自動運転を経て操作を安部にバトンタッチ。高橋の指示する声が響く中、ミス無く課題を終え、今大会最高得点を記録した。映像審査で行われた全国大会では入賞を逃したものの、今夏が目標だった三連覇は、学校の歴史に新しく刻み込まれた。

入学当初、ロボット制作は未経験だった三人は、当時優勝した先輩たちの姿に「雲の上の存在。ただただすごいと思った」と口をそろえた。三人がつないだバトンは後輩へ。伝統と技術力はまた次の代に引き継がれた。